

在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」の試み

山谷・すみだリバーサイド支援機構 ○山本雅基, 山本美恵, 佐野直美
早稲田大学大学院人間科学研究科 川上祐美
江戸川大学 社会学部 平山満紀
訪問看護・バリアン 遠藤美由紀

■目的 「きぼうのいえ」では在宅ホスピスケアを実践しているが、開設以来、本施設で死亡した4名の入居者への終末期の対応を分析し、このような施設における死の看取りのあり方を検討する。

■方法 ①対象は、開設以来の入居者53名のうち本施設で死を看取った4名。②レトロスペクティブに入居の経過、入居期間と生活の様子を分析。③臨死期、葬儀、死後の問題について検討する。

■結果 ①A氏は、67歳男性、肝臓がん、入居52日目に死亡。②B氏は、70歳男性、肝臓がん、入居2日目に死亡。③C氏は、70歳女性、肝硬変、入居89日目に死亡。④D氏は70歳男性、中咽頭がん、入居41日目に死亡。全員が病名、病状を知り、本施設で最期を過ごすことを希望して生活し、穏やかな臨死期を経て死亡。3事例は葬儀をキリスト教会で執り行い、遺骨は本施設での保管が2件、配偶者の引き取りが1件。1事例は葬儀を行わず知人が遺骨を故郷の仏教寺院に届けた。

■考察 本施設の当初の目的は、マザーテレサの「死を待つ人の家」の活動を日本で実践することで、いわゆるホームレス、行路行倒人の看取りを想定していた。しかし施設開設の際の福祉事務所からの要請は、①生活に困窮する生活保護受給者、②行き場のない社会的入院中の人、③余命が限られた

不治の患者で受入れ先のない単身者、への宿舎提供であった。協議、検討の結果、本施設はこうした人々のうち、在宅ホスピスケアが必要な対象者を中心に迎えてケアを行うことにした。そのための本施設の運営指針として、①がん、HIVの人にのみ提供される施設ホスピスに対し、すべての人々の終末期を対象とした在宅ホスピスとする、②集合住宅形式をとり、かつ地域に密着させることで、往診医、訪問看護師、介護サービスを効率よく導入し、三者が連携して働く、③入居者同士に家族的な雰囲気醸成されるよう配慮する、④プライバシーを守り日常性を確保し、各々の生活様式を尊重する。嗜好品も在宅の観念から極力制限を加えない、の4点を掲げた。さらに、これまでに看取った4人の事例から、終末期の対応には、「自らの存在や死に対する虚無感」へのケアが必要であることが改めて実感させられた。これに対して本施設では「失敗や苦難に満ちた人生でも、この生を生きることには最高の価値がある」ということを信念として掲げ、ボランティア、スタッフが積極的に入居者の人生を肯定して寄り添うことで、スピリチュアルな痛みの緩和が図られることを目指している。開設後間もない施設でもあり、まだまだ組織的にも未熟であるが、入居者一人ひとりと真摯に向き合い、より良い看取りができるよう取り組んでいる。